

総論

1 ふくいブランドを世界に



小寺 英樹
KODERA Hideki
福井県観光営業部長

先進的に地域ブランド戦略に取り組んできた福井県。その魅力向上と発信を目指した体制づくりから、県民一人ひとりによる運動まで、ブランド創造に向けた様々な取り組みが展開されている。そこから生まれたふるさとへの自信と誇りが、新しい地方を創る原動力となる。

営業戦略会議

福井県では、平成21年4月から“ふくいの魅力”の向上を図り、その魅力を国内外に発信するため、都道府県の組織としては例のない“営業”という名称を用いた「観光営業部」が創設されました。また、すべての部局長が参加する「営業戦略会議」を設置し、営業指針を策定しました。これは、自治体としては全く新しいスタイルだと思います。基本理念を4つ掲げ、具体的な営業活動や重点項目を決めています。

基本理念の1つ目は「営業マインドに基づいた現場主義、顧客主義」とし、具体的には、職員が日頃から県内企業や生産者等の情報を現場で直接把握するとともに、県外の消費者や企業等に出向き、販路開拓に結びつく情報の獲得に努めることなどがあげられます。2つ目の「人的ネットワークの拡大とメディアを通じた情報の営業的発信」は、職員一人ひとりが人的ネットワークの形成・活用と、メディアを通じた情報の営業的発信に努めるということです。3つ目の「全庁的に営業情報を共有」は観光営業部が営業活動を主導し、各部局は自らの営業活動を強化し、全庁一丸となって営業活動を行うということです。4つ目の「県内企業や生産者等との共働営業」では、新たな販路の開拓に努めることとしました。営業は観光営業部だけではなく、全庁一丸となって行うものです。教育、農業、産業など様々な分野との連携を強めながら、ブランド力の向上や観光誘客につなげたいと思っています。

観光営業部の組織

営業の中心である観光営業部は、「ブランド営業

課」「観光振興課」「ふるさと営業課」「国際・マーケット戦略課」の4つの課から成り立っています。

ブランド営業課は、福井のブランド力や認知度を向上するため、営業の先頭に立ちます。観光振興課は、観光客の誘客や観光消費額の拡大を目指して、国内外の戦略を練って活動しています。ふるさと営業課は、ふるさと納税やふるさと帰住を拡大するための営業に励んでおり、ふるさと納税に関しては、人口比で全国トップクラスを誇っています。ふるさと帰住については、平成21年度をふるさと帰住元年と位置付け、県外4箇所に「ふるさと帰住センター」を設けて着実に成果を上げています。国際・マーケット戦略課は、東アジアに対して県産品の販路開拓の支援を展開しています。

この4課で、福井のことを「知ってもらって、来てもらい、買ってもらって、最後には住んでもらおう」ということです。

ふくいブランド

福井県を知ってもらうための強力なツールを紹介しましょう。

① 恐竜

皆さんは、国内の恐竜化石の約8割が福井県で見られていることをご存知でしょうか。その福井に、世界三大恐竜博物館の一つに挙げられる「福井県立恐竜博物館」があります。入場者は年間約40万人で、年を追うごとに着実に入場者が増えています。この恐竜博物館が、今年(平成22年)開館10周年を迎えます。これを機に、昨年、世界的にも価値の高い恐竜カマ



写真1 世界最大級の恐竜博物館(勝山市)

ラサウルスの全身骨格化石を購入し、開館10周年特別展の目玉の一つとして展示する予定です。その恐竜の化石は、昨年秋にアメリカから運ばれてきていて、クリーニング作業をしてから骨格標本として組み立てていきます。この夏の公開では、化石クリーニングの過程を皆さんに紹介できるでしょう。何度来ても楽しめるよう展示に工夫をこらしてお待ちしています。

また、アメリカでの化石の状態や日本に到着し恐竜博物館に運ばれる様子をドキュメンタリー映像として放映するなどして、盛り上げていきたいと考えています。このようにして認知度を上げていき、「恐竜といえば福井県」「福井県といえば恐竜」と多くの人に言ってもらえるようPRしていきたいと思っています。

② 学力・体力日本一

平成19年から文部科学省によって実施されている「全国学力・学習状況調査」で、福井県は小学6年生は全国2位、中学3年生は1位という全国トップクラスの成績を3年連続で取っています。また、直近の「全国体力・運動能力、運動習慣等調査」では、小学5年男

女、中学2年女子は全国1位、中学2年男子も3位と体力の方でも全国トップクラスです。その背景には家庭、学校、地域が一体となって教育を進めているなど、いろいろな要因があると思いますが、その秘密を探る本、太田あや著『ネコの目で見守る子育て』(小学館)が昨秋出版されました。福井の子どもたちの学力・体力が高いことを知ってもらうことで、福井についてもっと興味を持ってもらうきっかけにもなる本です。学力テストの結果は、テレビや新聞などのメディアを通じて報道されますが、本の出版により、より情報が蓄積され、浸透が図れると思います。

この本は、出版社の編集者に、福井県の子どもの学力・体力が高いことを情報提供して“営業”したところ、編集者が本の企画を思いついたことがきっかけとなり出版に至りました。これは、営業指針の基本理念にある「人的ネットワーク」の活用にあたります。本の出版をきっかけに、子育て・教育応援雑誌からも取材の依頼がありました。また、本県同様に学力・体力全国トップクラスの秋田県と東京でシンポジウムを開催し、全国紙の新聞やテレビに取り上げられたことで、多くの人に知っていただくことができました。

こうした、学力・体力全国トップクラスという一つの「ふくいブランド」を多方面からアプローチしていくことが、より広く、深く知っていただく有効な手法だと考えています。皆さんも福井の教育力の秘密を探りにいらっしゃいませんか。

③ 幕末福井

幕末といえば、西郷隆盛、坂本龍馬といった人物や、明治新政府に多くの人材を輩出した薩長土肥といった藩が真っ先に思い浮かぶでしょう。あまり知られていないものの、幕末期の福井藩も全国でも屈指の雄藩としての存在感を示していました。幕末の四賢侯の一人として知られる松平春嶽や、彼に登用された実力ある藩士たちがいた福井藩は、坂本龍馬などの幕末の志士たちとのエピソードも多く、幕末史を語る上でも欠かせない存在です。

そこで、昨年(平成21年)が安政の大獄から150年にあたることから、これを機に幕末の福井を全国の皆さんに知っていただくために、様々なPR活動を行っています。県内外において幕



写真2 「ネコの目で見守る子育て」



写真3 学力・体力トップクラスの秋田県とのシンポジウム

末福井に関する講演会をシリーズで行い、特に首都圏では、ゆかりの地である千代田区(福井藩上屋敷跡地)、荒川区(橋本左内没地)、新宿区(小浜藩下屋敷跡地)においてパネル展などを開催しました。講演会参加者や展示を見た方からは、「福井とのつながりを初めて知った」「もっと詳しく知りたい」との反響を多くいただき、幕末福井の可能性を改めて感じました。

また、明治大学(創立者の一人である矢代操が福井出身)と連携して、「幕末維新期の福井藩—松平春嶽とその周辺—」と題したシンポジウムや連続講座を行い、当時の福井藩が果たした役割を検証し、参加した多くの方々と思いを共有することができました。

さらに、幕末の福井を多くの人に知ってもらう手段として、幕末福井の群像を取り上げた歴史小説、ドラマ、映画の制作にまでつなげたいと考えています。現在、小説、脚本などの材料や資料として松平春嶽関連文献の現代語訳、幕末期の地図の製作を進めており、小説家、脚本家、映画関係者に提供をしています。今後もこうした活動を続けて、ゆくゆくは福井を舞台とした大河ドラマの放送を実現したいと考えています。

最近、「歴女」という言葉をよく耳にしますが、歴史ブームの中、若い女性が歴史に関心を持っています。彼女たちは誰もが知っている人物、例えば、織田信長、豊臣秀吉、徳川家康などの武将ではなく、どちらかというあまり有名でない武将に興味を持つ傾向があるそうです。そういった意味では、全国的にはあまり知られていない幕末福井の群像も十分可能性があると思っています。また、歴女は歴史上の人物ゆかりの地や事件の舞台になった場所などに直接出向くことも多く、歴史を目的とした観光客も増えているとのことです。小説、ドラマ、映画などの作品を通じて福井の歴史に興味を持っていただき、多くの方が福井に来るきっかけをつくりたいと思っています。

④ 大河ドラマ『江～姫たちの戦国～』

平成23年のNHK大河ドラマは『江～姫たちの戦国～』が放送されることが決定されています。主人公は、乱世に生まれ、劇的な人生を送ったことで有名な浅井三姉妹(浅井長政とお市の方の娘)の三女・お江です。三姉妹は、母であるお市の方が柴田勝家に嫁いでから豊臣秀吉に攻め滅ぼされるまでの間、短い期間ではありましたが、柴田勝家の居城のあつ



写真4 幕末福井の新宿パネル展



写真5 明治大学での講演



写真6 旧越前松平家別邸跡「養浩館庭園」

た福井の地で仲睦まじく過ごしました。また、次女のお初は、小浜藩主である京極高次の正室となり、現在も福井県小浜市には、お初ゆかりの寺、常高寺が残っています。

このように、福井に関係の深いテーマに決定したことを絶好の機会ととらえ、ドラマの放送に合わせて様々な仕掛けをしていきたいと考えています。今後、関連する県内市町と連携して、ドラマをきっかけにたくさんの人に訪れていただけるよう、また、訪れた人に福井の歴史や浪漫を十分に満喫していただけるよう、地元を盛り上げていきたいと考えています。

⑤ 女性落語

平成19年放送のNHKの連続テレビ小説『ちりとてちん』をきっかけに、平成20年から福井県で女性だけの落語大会を開催しています。これは、ドラマの主人公が福井県小浜市出身の女の子で落語家を目指すというストーリーであったことから、福井県を「女性落語発信の地」として売り込んでいこうとするものです。

今までに、北は北海道、南は九州宮崎まで、年齢は7～80歳まで幅広く参加していただいております。出場者は、延べ110名程度になります。会場は毎回満員になり、入りきれない観客は別会場でのモニター映像を見ているほどで、会場全体が熱気であふれ



写真7 お初ゆかりの寺「常高寺」



写真8 「ちりとてちん」杯ふくい女性落語大会



写真9 考福学かたりべ講座

ています。審査員も東西のプロの落語家をお願いしており、レベルの高い戦いが繰り広げられる本格的な大会です。第1回優勝の福井県知事賞受賞者、現在の「露の紫」さんは、その後、プロに転向するなど話題も多く、福井に女性落語が定着することを期待しています。

考福学ノススメ

これまで、強力で売出ししている「ふくいブランド」について述べましたが、福井県には、歴史、文化、恵まれた自然や食べ物など全国に誇るべき地域資源がまだまだ数多くあります。しかし、残念ながら自分たち自身も知らないことが多いのも事実です。こうした問題を解決するため、福井県では「考福学」運動を展開しています。これは、県民一人ひとりがふくいの魅力を発見、再認識し、国内外に語り広げていくことにより、福井人としての自信と誇りを醸成していき、ふくいブランドの創造に向け取り組んでいこうとするものです。

この考福学には4つの段階があります。まず、知っているようで知らない全国・世界に誇れるふくいの魅力を再発見することから始まります(考福)。次に、再発見した魅力を家庭、地域、旅行・出張先などあらゆるところで「かたりべ」として語り広げていきます(口福)。様々な人に語り広げることで交流の輪が県内外に広がりがつなげていきます(交福)。こうした活動を通じて、ふるさとに自信と誇りを持つとともに、独自のブランドとして県外さらには世界から認められる福井県になることを目指しています(幸福)。

「考福学」運動は、県内各地の学校や公民館などでの考福学かたりべによる講座の開催や児童・生徒による県外でのかたりべ活動など、様々な形で実践されています。また、楽しみながらふくいの魅力を学んでもらうために、福井県の公式ホームページ上で考福学検定を実施しています。子ども向けのキッズ用検定コーナーも設けており、幅広い層が考福学に親

しんでもらえるような工夫をしています。先日も、県内の高校生がふくいブランドPRの英語プレゼンテーション大会を開催しました。これは、生徒の海外留学のために行われましたが、彼らが現地でふくいブランドを語ってくれることにより、福井の魅力が世界に発信されることになります。



写真10 考福学ノススメ
(<http://kofukugaku.pref.fukui.jp/>)

新しい地方が新しい日本を創る

ブランド戦略の基本は、実態としてブランド価値が高まること、それが県外や海外から評価されることにより、県民一人ひとりが「福井」に自信と誇りを持つということです。そして福井県の認知度も上げ、営業活動を強力で推進することで、観光や経済、雇用全体が良くなって、県民が生活の豊かさを実感できるようにしたいと考えています。そして、福井県が「ふるさと」の代表選手として、「新しい地方が新しい日本を創る」原動力になれば良いと思っています。



写真11 高校生による英語プレゼンテーション大会